新長崎学研究センター紀要　創刊号（2022年）
長崎外国語大学

講演録

# フルベッキ博士の生涯と日本の近代化

中　島　耕　二

新長崎学研究センター紀要　創刊号（2022年）
長崎外国語大学

【講演録】

# フルベッキ博士の生涯と日本の近代化

中　島　耕　二

2020年11月7日（土）、長崎外国語大学では大学開学20周年記念事業の一環として、新長崎学研究センター講演会「ギド･フルベッキと長崎」（於　長崎歴史文化博物館）を開催しました。

このたび『新長崎学研究センター紀要』創刊号の発刊を記念して、当日の講師をおつとめいただいた中島耕二氏（本学新長崎学研究センター客員研究員）による「フルベッキ博士の生涯と日本の近代化」の講演録を掲載いたします。

当日の講演では幕末にプロテスタント宣教師としてアメリカ・オランダ改革教会から日本に派遣されて日本にプロテスタントの種を蒔き、英語を用いて欧米の近代的な知識を普及し、明治維新の推進者たちに大きな影響を与えたギド・フルベッキの生涯を、関係資料をもとに紐解いていただきました。

《中島耕二先生　略歴》
1947年生まれ。1970年明治学院大学法学部卒業、三菱製鋼株式会社入社。2006年三菱重工精密鋳造株式会社取締役。2011年東北大学大学院文学研究科歴史学専攻博士後期課程修了。東北大学博士（文学）。明治学院大学客員教授を経て、現在フェリス女学院歴史資料館研究員・長崎外国語大学新長崎学研究センター客員研究員・シンガポール政府東南アジア研究所（ISEAS）在外研究員。
専門は日本近代政治･外交史､日本キリスト教史。著書に『長老･改革教会来日宣教師事典』（新教出版社、2003年）や『近代日本の外交と宣教師』（吉川弘文館、2011年）など。

キーワード：宣教師、長崎、お雇い外国人、無国籍者

## 1．はじめに

このたびは長崎外国語大学開学20周年という記念すべき日にお招きいただきありがとうございます。テーマがフルベッキということで私自身研究もしておりましたので、皆さまに新しいお話もできるかと思います。

長崎外国語大学においても長崎時代のフルベッキについては、非常に詳細にわたって研究されております。また、お雇い外国人時代と日本政府に雇われて、法制の整備や教育問題に取り組んだこともかなり研究されています。

しかしながら、宣教師時代とフルベッキの生涯全体を見通した研究というのは、あまりなされていません。今日は概説的になりますけれども、フルベッキの生まれた時から亡くなるまでの生涯を通してお話しする趣旨で講演をまとめました。

はじめにフルベッキの顔写真ですね。非常に聡明な印象のある顔立ちです。〔写真①〕それからレジュメには年表を用意しましたので時々参照していただきたいと思います。

写真①

日本におけるフルベッキは、アメリカ・オランダ改革教会の宣教師として1859年に来日しました。来日の理由は、1858年に日米修好通商条約が結ばれまして、総領事のタウンゼント・ハリスが日本の居留地に住んでいる本国の人たちには、キリスト教を指導しても良いという第8条という条文を入れており、それに基づいて宣教師の来日が可能になりました。もちろん日本人に対する伝道は徳川時代の祖法として厳禁でありました。

フルベッキは長崎で致遠館、あるいは済美館などで後に明治政府の要人となる人々に西洋の知識を伝授したという事績があります。それから主にアメリカですが留学生の斡旋をしております。

また、ひそかにキリスト教の伝道も行っていました。どうやって行ったかというと、英学を教えるわけですね。英語の授業で『聖書』を使うのです。『聖書』の教えをこっそり英語教育にすり替えて指導し、その中から求道者が生まれるという方法を採りました。

やがて長崎時代の実績が認められて、教え子たちから招聘を受け、明治2年に新政府のお雇い外国人となって大活躍するわけなのですが、有名な岩倉使節団の派遣を提案し、東京大学の前進となる開成学校の教頭を務め、民法・刑法その他法制度の改革にともなう建策を行いまして、特に明治2年から10年の間、日本が近代化を進めている文明開化のときに最大の功績を残した外国人の一人に数えられます。

フルベッキは明治10年にお雇い外国人としての任期を終えまして、その後は宣教師に復帰してキリスト教会で活躍します。『聖書』の翻訳、あるいは神学生の育成、教会の設立、地方伝道などに尽くして、日本のプロテスタント布教に大きな足跡を残しております。

長崎外国語大学も間接的ですけれども、フルベッキの恩恵にあずかってできたということになると思います。

その後、フルベッキは明治31年に68歳の生涯を閉じるということになります。

従いまして、本日のお話しのキーワードは「長崎」、「新政府のお雇い外国人」、そして「宣教師」という三つになるかと思います。フルベッキ研究の視座ということで、

長崎時代の活躍。これはある意味、地方史ということになります。そして、お雇い外国人時代の活動。これは近代化の先駆けというか、パイロットとしていろいろな功績を残しましたのでその研究。以上二つの活動に関する研究はかなり進んでいるのですが、宣教師としての活動あるいはフルベッキの生涯全般に関する研究というのは先ほど申し上げたように、まだ着手されていない状況です。

私はキリスト教史の研究者なので、どうしても宣教師としての彼の実績を評価したいという考えを持っています。実は長崎時代もお雇い外国人時代も宣教師として飛躍するための糧であったので、長崎時代や政府のお雇い外国人として活躍した時代にあまり光を当て過ぎますと、それだけで終わってしまう。本当は長崎やお雇い外国人としての活躍は全て宣教師として活躍するための下準備であったという歴史観を私は持って、フルベッキを研究しております。

フルベッキがどのような生涯を歩んだかというと、簡潔で分かりやすいです。まず、オランダで生まれました。オランダで22年間、成人になるまで暮らします。アメリカに移住しまして、ここで非常に短い7年間という期間でしたが、この間にコンバートして人生をがらりと変えるわけですね。これがアメリカ時代です。宣教師として長崎にやって来まして、ここで10年間、いろいろな面で日本の基礎となる人材を育てたということで、大きな意味があった長崎時代、長崎での経験を糧にした政府のお雇い外国人時代と続きます。後ほどお話ししますが、三条実美、今でいう総理大臣にあたるわけですけれども、彼よりも給料が高いという、お雇い外国人時代ですね。それから宣教師に戻った築地居留地時代。いったん本国に帰って戻ってきた赤坂時代。赤坂には、今のアメリカ大使館の前にホテルオークラがありますが、そこに彼の家がありました。その家で亡くなるという68年の生涯。年表もそのように区分けしております。

## 2．オランダ時代

まず、オランダ時代ですが、1830年にオランダのザイストの郊外で生まれています。父親は村長。村長といっても数十人の村です。酢の醸造業を営んでいました。お酒は敬虔なクリスチャンであったので造りませんでした。それから、多少の土地も持っていたということで小地主でもありました。1830年といいますと、日本では天保大飢饉でも知られる天保時代でした。

オランダはナポレオンに侵略されて、1815年までフランスの統括地でありました。1815年に王政を復活して再び独立しましたが、そういう比較的ナショナリズムが高まった時期に彼はオランダに生まれたということになります。8人兄弟姉妹でした。

レジュメのほうにも兄弟姉妹の名前を書いておきましたが、6番目に誕生した子供でした。それから、一家はもともと宗教改革で有名なルター教会員でした。特に北ドイツから北欧にかけてルター派が多くいました。

ところがフルベッキが生まれたザイストにはルター教会がなかったため、彼とその弟はモラビアン教会で学んだといわれています。モラビアン教会とは何かといいますと、今のチェコでフスという宗教改革者がいましたが、彼の教えの流れを汲むプロテスタント教会のことです。小さな教派でチェコから徐々にドイツのほうに移動して、一部、オランダにも来ていたといわれています。現在はアメリカのノースカロライナ州やペンシルベニア州のあたりで比較的多くの信者が活動しています。アメリカに移民したモラビアンの人たちがつくった吹奏楽団などもありました。クリスマスなどは彼らが町の中を回って、教会の士気を高めることをやっていました。

モラビアン教会というのは、『聖書』の研究でこうあるべきだということを言わない教派です。『聖書』を読んで自分が感じて、理解して、それでいいですよという教派です。他のプロテスタントは『聖書』にあることは絶対だというわけですが、比較的自由な『聖書』解釈をする教派になります。ザイストの人々はオランダの隣国はドイツ、フランスということで、オランダ語の他にドイツ語、フランス語も勉強するということになります。

1848年、18歳でモラビアン・アカデミーを卒業し、ザイストの鉄工所で働くわけですけども一部、フルベッキの伝記を書いたグリフィスという人が、フルベッキはユトレヒトの工業学校で学んだと書いています。ところがその後の研究によると、ユトレヒトには工業学校が存在しなかったことが判明しています。フルベッキ本人が言ったことなのか、グリフィスが誤って書いたことなのか分かりませんが、私の調べた限りでは、モラビアン・アカデミーを出た後、すぐにザイストの鉄工所で働いたという経歴の方が正しいのではないかと思います。

フルベッキは向学心に非常に燃えていた青年でしたので、単に鉄工所で働くだけではなく、おじに借金してピアノ、オルガン、声楽、英語とフランス語の個人レッスンを受けたという手紙が残っております。比較的、自我に目覚めていた青年期といえると思います。このときに学んだすべてが後に宣教師として役に立つことになります。やがて22歳を迎えたときに母親が亡くなりまして、これをきっかけにアメリカに移るわけですけれども、年表を見ていただきたいのですが、兄弟姉妹の半分以上がアメリカに移民しています。当時、オランダは海外に出る国民の動きが非常に盛んでしたので、そういうこともあるかと思いますが狭い国から新天地に行って、一旗揚げようというオランダ人がかなり多くいたようです。フルベッキは、アメリカに移住した妹の夫の誘いで、彼もアメリカに移ることになります。

彼の生まれた場所ですが、ユトレヒトはちょうどオランダの真ん中辺り、ユトレヒトのすぐ近くがザイストという町です。

オランダの国土は狭いですが、ナポレオンが占領していた時代はオランダとベルギーは一つの国でした。その後、オランダとベルギーの間でプロテスタントとカトリックの独立戦争が起きて、カトリックの人たちがベルギーを建国したわけですね。オランダの人たちは、プロテスタントの国をつくったということで、もともとはネーデルラントという同じ国でした。ザイストでフルベッキが学んだ学校は今も残っています。教会と学校が一緒になっていました。

1840年当時の建物がそのまま残っていますが、日本は江戸時代ですよね。オランダはもう近代化を果たしているという、カルチャーギャップはかなりあったと思います。今もたくさんの生徒さんがここで学び、日曜日には礼拝が行われています。

## 3．アメリカ時代

フルベッキは22歳でアメリカに移住するのですが、なぜ移住したかといいますと、端的に申し上げると一旗揚げようという動機からです。オランダ人というのは、割り勘のことをダッチアカウントと言うように、非常に経済観念が発達した国民なのですね。したがって、アメリカに行って事業をやって一旗も、二旗も揚げようという精神で移るわけです。フルベッキが移った先はウィスコンシン州のグリーンベイというミシガン湖の北方になるのですが、そこにモラビアン・コロニーといって、有名なオットー・タンクという牧師がモラビアンの信徒を集めて一種のコロニーを作っていました。そこの鉄工所で働く要員としてフルベッキはアメリカに移ることになります。コロニーの主宰者だったタンク牧師が住み、仲間を呼んだりしていた家も現存しています。

ところが、フルベッキは鉄工所でこつこつ働くだけでは一旗揚がらないということで一念発起しまして、翌1853年にアーカンソー州のヘレナというところで、今度はエンジニアとして採用されます。1830年代ぐらいから橋梁工事が非常に盛んになりますが、そういった工事に彼が携わったということになります。ところが誰も知り合いのいない田舎に行ったものですから孤独に襲われて、何とか孤独を解消しようということで教会を思い出し通います。一説によると近隣に教会がなかったことから20キロも30キロも歩いて、教会に通ったといわれています。

ところが、北国のオランダ育ちのフルベッキが南部のアーカンソーに移って、気候が合わずに体力を消耗して、そこにコレラの流行が重なり罹患し、生死の境をさまようような重病に陥ります。このとき身内が見舞いに来てくれましたが、フルベッキは

もしコレラから救われたら自分は一生を神にささげるという約束をします。幸い病癒えて、タンク牧師の鉄工所にもう一度戻って、もとの生活を取り戻すことになります。

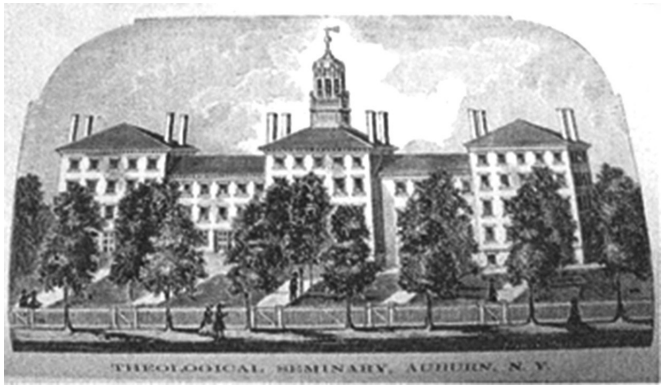
そのときに俄然経営者になる、事業で成功するという気持ちが湧いてきて、タンク牧師から工場を買い取り、自分で鉄工所を経営します。ところが、後ほどフルベッキの性格をご紹介しますけれども、フルベッキはとにかく金銭感覚がありません。非常に経済観念に疎い人だったわけですね。意欲はあるのですけども、細かい計算に疎く経営に失敗してしまいます。そこで自分は事業者には向かない。コレラ罹患のとき誓ったように神様に身を捧げようということで、伝道者になるための道を選びます。

1855年、ニューヨーク州のオーバン神学校。これは長老教会の神学校ですが、フルベッキはここを受験して合格します。ただ、疑問があるのは当時、4年制の大学を卒業しないと神学校に進学できない点です。神学校というのは、いわば大学院課程ですので、大学を出た人が入れる学校なわけです。ところがモラビアン・アカデミー、いわゆる高校しか出ていないフルベッキがなぜ一気に神学校に入れたのか、疑問が残っています。

今でも推薦入学という制度がありますね。フルベッキの妹の夫は牧師でしたので、彼あたりが推薦書を書いて、特別に試験を受けさせて神学校に入れたということだと思われます。

フルベッキが学んだ当時のオーバン神学校の校舎の写真も残っています。〔写真②③〕

1930年代にオーバン神学校は廃校になりまして、ニューヨークのユニオン神学校という大きな神学校と合併します。つい最近までユニオン神学校内オーバン神学科として名前は残っていました。ところが、ユニオン神学校までもが数年前にまたしても廃校になって、コロンビア大学の神学部になりました。オーバン神学校もユニ




写真②　コロンビア大学図書館所蔵

写真③　1985年中島撮影

オン神学校も長老教会の神学校です。ところがコロンビア大学というのは、聖公会が建てた大学ですので、長老教会が聖公会に吸収されたということになってしまいました。

ユニオン神学校というのは、コロンビア大学の目の前にあるので、ロケーションの関係でそういうことになったのかなと思います。日本もそうですが、キリスト教そのものがだんだん弱体化していくという事象の反映だと思われます。オーバン神学校のチャペルは素晴らしい建物でした。ティファニーのステンドグラスが入っているのです。お日さまが当たるとステンドグラスを通じて、チャペル内に素晴らしい光が入ってくるわけですね。

一般にプロテスタントの教会というのは、カトリック教会と違って、飾りも何もないのが普通なのですが、アメリカの教会はステンドグラスで、プロテスタント系でも飾りを持っている教会が多いです。ということで、教会として残っているのではなく、市の歴史的建造物ということで残されています。非常に立派な建物です。ここでフルベッキは、神学教育を受けるということになります。

彼がアメリカ時代に歩んだ足跡ですけれども、まずオランダからニューヨーク港に着きます。自由の女神、あれはもっと後に建造されたものですが、そこに入ってきて、その後、ウィスコンシン州のグリーンベイというところにタンク牧師のコロニーがあり、ここに移ります。ここから南に位置するアーカンソー州のヘレナという、非常にひなびたところで土木技師として働きました。その後、再びグリーンベイに戻って、神に献身するということでニューヨーク州のオーバンという所に行きます。

ここはエリー湖の湖畔にあって、非常にきれいな場所です。リンカーン時代に国務長官を務めたシワードの出身地としても有名な所です。フルベッキがアメリカで活動したのはたったこれだけです。実際にニューヨークあるいはボストンやフィラデルフィアといった大都市に住んだわけではないので、田舎的要素を多分に持った西洋人ということで、それが日本人に非常にフィットしたということが言えると思います。

アメリカ時代の生活ですけれども、オーバン神学校の近くにフルベッキと一緒に最初期に日本にやって来たS.R.ブラウンという牧師が牧会していたオワスコレット、サンドビーチ教会があり、この教会の助手となります。フルベッキはドイツ語ができましたので、ドイツ系移民の人たちに説教する役割を受け持ちます。ここで大きな出来事が起こります。後に奥さんになるマリア・マニヨンを信徒の中に見つけたのです。やがて神学校を卒業する少し前になりますと、日本が開国し、宣教師も派遣できるようになったということで、アメリカ・オランダ改革教会が、オランダ語ができる宣教師を募集することになります。

なぜオランダ語ができる宣教師を募集したのかというと、日本人が洋学を学ぶために用いたのがオランダ語だったからです。そのため、英語よりオランダ語が通じ易い

だろうということで、オランダ改革教会はオランダ語ができる宣教師を募集します。ところが先ほどお話ししたように、彼が学んだ神学校は長老教会です。募集していたのはオランダ改革教会。教派が違いますので本来は派遣対象とはならないわけですが、なかなか人材がいないということで、オーバン神学校の校長がフルベッキをオランダ改革教会に推薦します。彼はこれに合格したのです。

フルベッキはいざ合格してしまうと、教派の違いという問題をどのように解決すべきか困ってしまいます。そこで神学校を卒業すると同時に長老教会で牧師になる資格の按手礼を受領し、その翌日に長老教会からオランダ改革教会に転籍します。ですから彼は長老教会の牧師の資格というのは半日しか持っていませんでした。

そして、サンドビーチ教会で出会ったマリア・マニヨンと結婚して、日本へ宣教師としてやって来ることになるわけですが、このとき、マリア・マニヨンは19歳です。フルベッキは29歳。9歳か10歳ぐらいの年齢差がありました。伴侶のマリアと出会ったオワスコレットのサンドビーチ教会の建物は現存しています。しかしキリスト教の衰退を反映して、現在は結婚式場になっています。教会風の式場で結婚式を挙げて、すぐに披露宴という非常に効率の良い施設になっています。当時の建物が残っているので、外観だけ見れば素晴らしい感じがします。長崎新聞が掲載したフルベッキと19歳のマニヨンの新婚時代の写真もあります。

通常、写真をカップルで写すときは男性が左側に立つことが多いのですが、この写真はそうではありません。私も当初裏焼きではないかと思って疑っていましたが、裏焼きじゃない証拠を発見しました。どこで発見したと思いますか？実はボタンにその答えがあります。ボタンが男性の留め方で向きが合っていたので、裏焼きではないと分かりました。溌剌としたフルベッキの姿です。

## 5．長崎伝道時代

1859年、フルベッキとブラウンとシモンズという3人の紳士がオランダ改革教会の宣教師として派遣されます。長老教会は、有名なヘボンをこのとき派遣しています。フルベッキはブラウンの教会で助手をしていたこともあり、どちらかというと二人の関係は師弟に近いですね。

もう1人のシモンズは医者です。横浜に来たわけですけれども妻がユニテリアンでトランプ遊びをしたりして、宣教師仲間から不興を買ったために、1年後に宣教師を辞めざるを得なくなります。その後、彼はどうしたかというと、横浜で病院を開きました。これが十全病院という大きな病院になり、現在の横浜市立大学の医学部に至ります。それから、シモンズは福澤諭吉と縁がありまして、福澤が大病を患った際に主

治医となって、福澤諭吉付きの医者を務めることになります。

残念なことにシモンズは比較的若くして死んでしまいます。ところがアメリカに残した母親がいまして、シモンズが亡くなるちょっと前にお母さんを日本に呼び寄せていました。福澤諭吉は世話になった先生だということで、慶應義塾の構内に家を建て、そこにシモンズのお母さんを住まわせます。福澤諭吉は恩に厚い人だったのですね。そういうことで、シモンズは福澤諭吉との縁により、フルベッキと同じように青山霊園に立派なお墓がつくられています。こういうことも宣教師の「余話」ということで結構面白いのですが、次に進みます。

フルベッキの長崎時代ですが、長崎フルベッキ研究会などがいろいろと調べられているので、あまり私のほうから言及することはないのですけども、1859年の今日（講演日は11月7日）、フルベッキは長崎に着きました。偶然ですね。アメリカ監督教会、日本では聖公会といいますが、その宣教師で中国からやって来たリギンスとチャニング・ムーア・ウイリアムズの出迎えを受けます。

チャニング・ムーア・ウイリアムズは、現在の立教大学と立教女学院を設立した宣教師です。いずれにしてもまだキリスト教の禁制下ですので、彼らは冒頭に申し上げたように間接伝道として、英語教育の中で『聖書』を教え、中国語の『聖書』を知識層に販売するようなことを行っていました。

長崎の10年間も穏やかな日々ばかりではなかったようですね。生麦事件の後、イギリスと薩摩藩が戦争するという風説が伝わって、フルベッキも出島に逃げたり、上海に避難したりしています。なぜ出島かというと、彼はオランダ人だったからですね。やがて彼の人格、あるいは知識が日本人に伝わって、招かれて幕府の英語稽古所の教師を務める。あるいはお話を聞きたいということで、佐賀藩家老の村田政矩が求道する。それから、佐賀藩の関係で長崎の蕃学稽古所、後の致遠館の教師も引き受ける。こういった活躍をするわけです。

きょうの講演では、長崎時代は大まかな概要だけをお話しします。この時代の教え子が明治新政府の大隈重信、副島種臣であって、彼らがフルベッキを新政府に招待、招聘するということで、彼は長崎を去ることになります。ただ、ちょっと去り際が悪いところがあったりします。彼の後任にスタウトが来たのですけれども、2週間ぐらいしか引き継ぎをしていません。本来、宣教師は一緒に伝道地を回って、きちんと引き継ぎをしてから次の任地に行くわけですが、彼は後任にあまり気を使わずにさっさと東京に行ってしまいます。

もう一つフルベッキの長崎での大きな仕事は印刷、活字の関係ですね。上海の長老教会の印刷所長をやっていたガンブルという人物を長崎に招待して、本木昌造たちに活字の技術を教えさせる斡旋をしています。ただし、第1回目の伝習の際にはガンブ

ルとフルベッキは会っていたようですが、第2回目の伝習時にはすれ違っています。ただ、活字伝習のそういう手はずを整えたというのもフルベッキによるものということは覚えておいて良いと思います。

また、これは長崎時代の活躍の一部ですが、通詞および通事たちに英語を教えるということがあります。このことを通じて、フルベッキは済美館や致遠館において人脈を構築していくわけですけれども、彼の素晴らしいところは、非常に謙虚で、自慢をしないのですね。俺が俺がという人は日本人にあまり好まれないことは皆さんもお分かりかと思いますが、もしフルベッキがそういうタイプの人物であったら、大隈、副島も彼を東京に招待しなかったと思います。功績は全部、彼らに与えて、自分は謙虚に後ろに下がるという、そういう性格だったことが幸いしたと思います。

長崎時代に大隈たちにどんな教育をしたかいうことも研究がなされておりまして、特にアメリカの憲法、経済原論、そして国際公法。今でいう国際法も講義をしていました。統計学の杉亨二あたりにも影響を与えたという活躍が評価されて、新政府のお雇い教師となるわけです。

それから、フルベッキの話をすると、必ずフルベッキ群像写真のことが話題に上がりますね。誰が誰だとか、いろいろ見解は分かれるところでもあるので、深くは言及せずスライドの中に参考までに掲げておきます。西郷隆盛がいるなどとも言われていますね。

フルベッキ関連の資料として東京大学に保管されているフルベッキの経歴書も紹介しておきます。最初の契約は明治2年4月1日から6カ月。まだこのときは暦が変わっていないので、西暦表記では4月1日ではありません。大学南校の語学および学術教師として採用するとの内容です。

## 6．政府お雇い時代

年俸は5000円です。このときの5000円ですから月給400円以上になるわけですね。ものすごい金額で採用されていることになります。履歴書によると1カ年ずつ雇用期間が延長され続けています。教え方がうまい。あるいは、非常に政府にとって有益な知識を与えてくれるということで、次は教頭に昇任します。そして月給も600円に昇給。先ほど触れた総理大臣並みの給料をもらうということになります。

結果として、明治6年に東京大学（当時は第一大学区開成学校）は退職になって、その後、元老院とか正院で翻訳に従事することになります。

ただ、この履歴書にユトレヒトの工業学校を出たと書いてあるわけですが、東京大学に提出された履歴書にまでそういうことが書いてあるということは、工業学校の話

は後に伝記を書いたグリフィスが言ったことではなくて、フルベッキ本人が言い出したことではないかと思うわけですね。鉄工所で働いていた実績を工業学校で学んだというふうに言ったのではないかというような、疑いもちょっと持っております。

その後、大学南校の教師を務めていたときにブリーフ・スケッチを大隈重信に渡すわけです。これは遣外使節派遣の提言につながるわけです。

この背景ですけれども、明治天皇による五箇条の誓文の第5条「智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ」つまり、外国の知識を吸収して国を発展させようということを神に誓ったのですが、翌日、五榜の掲示というものを出します。その中の第三札に切支丹禁制の高札を更新する内容が入っています。世界に知識を求めようと言いながら、キリスト教の信仰は駄目だと言っているわけですね。明治政府の矛盾がこういう所に出ているわけです。いずれにしても、フルベッキは遣外使節のブリーフ・スケッチを大隈に渡したわけですけれども、受け取った大隈はまだ戊辰戦争も終わっていない時期に外国に人を派遣するのは時期尚早ということで、これを桑折の奥底にしまってしまいました。

これを後に岩倉が聞き付けて、実行してしまったわけですけれども、フルベッキがなんでこういう稟議書を出したかというと「私はしばしば国家の福祉を増そうと願う聡明な人たちから、政治の諸形態、諸外国の法律、司法行政、国家相互間の政治的平等、教育方法、宗教制度、その他西欧文明に関する種々の諸問題について質問を何回も受ける」と言っており、いちいち対応するのが面倒だった可能性があります。それならば自ら見聞に行きなさいということで、フルベッキはブリーフ・スケッチを作って、大隈に渡したわけですね。清書されたものが残っていますが、これは大隈に出したものではなくて、岩倉具視に出したものです。非常に丁寧に、きれいに書いてあります。

最終的に岩倉使節団が派遣されることになったわけですが、大隈は出遅れたことをとても悔やんでいます。「使節の派遣のことは、素と余の発議にかかり、余は自ら進んで使節の任に当たらん」と言っていることからもその思いが伝わります。当初新政府内では大隈使節団の派遣ということで半ば決定していたのですが、大隈が薩長派から忌避された結果、岩倉使節団になってしまいます。大隈使節団になっていれば、明治日本の行く末はまた別の方向に変わったかもしれません。フルベッキは、なぜこういうことをしたかというと、欧米に行って、キリスト教国の繁栄を見てきなさいと。キリスト教がいかに大事かっていうことを明治新政府の幹部が認知すべきだと。こういう思いで稟議書を書いたのですが、岩倉使節団の派遣にあたって彼の思いは除外されてしまいます。

しかし、こっそりと田中不二麻呂と久米邦武。これは『米欧回覧実記』を書いた人

ですけれども、この2人を宗教調査員に任命しています。明治政府は言うこととやることが違っているのです。

その後、岩倉使節団が欧米を回っている間に各国から長崎で発覚した浦上四番崩れの対応に関する批判が出て、それが引き金となって切支丹禁制の高札が撤去されただろうという話もありますけれども、実は岩倉使節団が帰ってくる前に留守政府が切支丹禁制の高札撤去をしています。

したがって、いろいろな書物に岩倉使節団が直接、禁制を解いたということが書いてありますけれど、厳密にいうとそうではなくて、岩倉たちのリポートに基づいて留守政府が決断したというのが実態ですね。

ただし、高札撤去に関してイタリアやアメリカの公使に対しては、キリスト教の信仰が自由になったという説明をするいっぽうで、国民に対してはキリスト教が禁止されていることは既に周知されており、高札はもう要らなくなったため撤去するという説明をしているのですね。先ほどの話ではありませんが、言うこととやることが違うわけです。

フルベッキが東京大学の前身の開成学校時代に行った事績は以上のようなことです。しかしながら、注意したいのは、当時のフルベッキは外国人教員の採否などに関する全権を委任されているとはいいながらも実際のところ、学校の運営にはタッチできませんでした。外国人には、あくまでも主導権は持たせないという明治政府の方針でありました。

そのほか、大きな事績として挙げられるのがドイツ医学採用の建議でした。ところがそれまで採用されていたオランダ医学というのはドイツ医学のコピーにあたるわけですよね。要は先祖返りを提唱したという話になるのです。

スライドの写真は開成学校時代の集合写真です。各藩から選ばれた優秀な人たちがこぞって学んでいました。すごい人数です。ちょうどこの辺りにフルベッキがいます。フルベッキは左院、元老院でも活躍を続けて、ラトガース大学というオランダ改革教会経営の名門大学から名誉博士号を受けることになりました。その後は、元老院で翻訳に携わります。その結果、お雇いを辞めるときに勲三等を与えられています。当時、勲三等は、外国人としては最高位の勲位になります。新政府との雇用が終了したのは明治10年、フルベッキが47歳のときです。

開成学校時代のエピソードを紹介します。あるときフルベッキは開成学校から築地居留地に出掛けました。そのときにどういう理由か、兵隊さんが道をふさいで通してくれなかったのですね。それでフルベッキはどうしたかというと、なんと所持していたピストルを出したのです。たしかに攘夷の風潮が残っている時代ですからフルベッキも護身用にピストルは持っていたものと思われますが、驚きました。これはその時

の様子を記したものですけども「フルベッキことピストル相収め」と書かれています。これはガードマンがフルベッキに付いていたのですが、フルベッキが通行を邪魔されたときにピストルを出したけれども、われわれも一生懸命、フルベッキを守りましたと報告書にあります。宣教師であってもお雇い外国人には護衛がいたということをこの報告書で初めて知りました。

フルベッキがお雇い時代にやったことを列挙しておきます。公園を造りなさい、お墓を整理しなさい、専売をしなさい、銀行制度やナポレオン法典を勉強しなさいなど多種多様な提言が含まれています。加えて、フルベッキが関わった施策としては直接、間接も含めると、廃刀令、断髪令、廃藩置県、郵便制度、裁判所、戸籍調査、陸海軍省の設置、名主・庄屋の廃止、師範学校や図書館、気象台などの新設、太陽暦の採用、時刻法の制定。徴兵制度。それから、官庁を日曜休みにする提案も行いました。そうしないと教会に行けなくなるからです。教会に行かせるために日曜日を休日に制定する。こういう提言も行いました。

同僚のワイコフという人がフルベッキについてこのように言及しています。「フルベッキは夜の時間を猛烈な読書と研究に消費せざるを得なかった。氏があるとき、筆者に語ったところによれば、政府へのお雇い期間中は読書とその結果を説明するのに忙しく、仕事の大部分を口頭で行った。物を書く時間も機会も持てない。その結果、筆下手になった」と記しています。従って、フルベッキの考えを示した書籍は、厳密に言うとフルベッキによる著書ではないのです。彼が口述したものを全部、他の人たちが聞き取って書き連ねて出版するわけです。キリスト教関連の本も数冊出しますけど、ほとんど同じように口述筆記によって書かれています。長崎時代も同様であったと思いますけれど、フルベッキは自分で勉強したことをすべて日本人同僚に口述して記録してもらうという毎日を過ごしていたようです。

フルベッキの息子が言っていますが、「父は読んだ本の内容を3年後、5年後でもすべて覚えている。どうやら覚え方にコツがあって、覚えた箇所に印を付けている。その印を見ればいつ、何を読んだっていうことを分かるようにしてあった」ということです。ものすごく整理が良く、頭の回転が速かったということが分かります。宣教師に戻ってから、築地居留地内の東京ユニオン・チャーチの設立に尽力しています。勲三等の勲章をもらったときの記念写真も残っています。それから、フルベッキについて一番問題になるのは、彼は明治政府の秘密をたくさん知っているのですね。

フルベッキの娘のエンマが父の亡くなったときに書いた手紙がありますけれども「父の日記やノートブックは大切に保存しています。父がしばしば申しておりました。『もし私が日本人とその習慣、道徳等について私の真実な見解を発表したら、この国での私の有用性は失われてしまいます。私は荷造りして、すぐに国を去らねばなりま

せん』と。全くそのとおりで、お分かりだと思いますが、伝記を書く人は非常な注意を払わなければなりません」と。おそらく、フルベッキ日記には国事の機密が沢山書いてあったと思われるのです。この日記は行方不明になっています。フルベッキはアメリカに子孫がいますが、彼らは所在不明だと言っています。

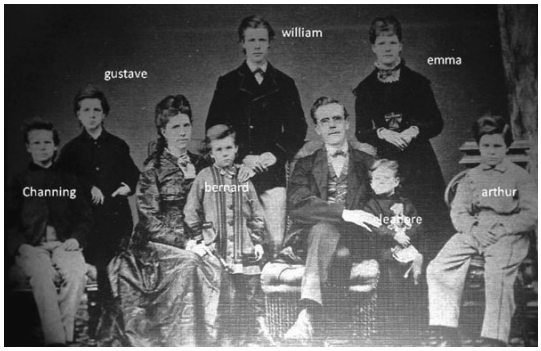
## 7．東京伝道時代

築地居留地をスライドに掲げておりますけれども、お分かりのように周りが堀で囲まれていて、これはまさに外国人を閉じ込める、あるいは日本人が居留地に入らないという意味において出島の発想そのものですね。そういう形式で居留地を日本政府は全国各地につくりました。

伝道時代の事績についてもいろいろとありますが、大事なことに『聖書』の翻訳や賛美歌の制定、それから教会の統一があります。この頃、明治学院ができたわけですけれども、明治学院はアメリカ長老教会とアメリカ・オランダ改革教会とが共同でつくった学校です。下関にあります梅光学院も同様です。オランダ改革教会が単独でつくった学校がフェリス女学院です。長老教会単独の学校は女子学院、北星学園、大阪女学院や北陸学院があります。いずれも女学校でありました。当時は長老教会単独の大学はありませんでした。

フルベッキによる『聖書』の翻訳ですが、ローマ字で書いて、それを赤インクで訂正、さらに紫インクや青鉛筆で縦横に推敲して、一字一句、『聖書』の言葉にふさわしい日本語を探していたわけです。スライド上の文章が詩編の『ダビデの詩』のフルベッキ訳からの引用です。「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ…」と韻を踏んで、非常にリズミカルですね。下が今の新共同訳からの引用です。「主は羊飼い、私には何も欠けることがない。」説明調になっています。昔の人は上の表現の方がいいと言っておりますけども、これはフルベッキが推敲して作った『聖書』の翻訳なわけですね。

続くスライドはフルベッキ一家の家族写真です。〔写真④〕一部、写真の中に注記されたメモ書きの人名に間違いがあります。マニヨンに抱かれている子供がエレノアで、フルベッキに抱かれているのがバナードです。



写真④　高峰譲吉博士研究会提供

家族写真と言えばあの良く知られた群像写真ですが、フルベッキと一緒に写っている子供は、エンマなのか、ウ

イリアムスなのか議論が分かれています。1868年に撮った写真なので、エンマは当時5歳、ウイリアムスが7歳です。私はウイリアムスだと思うのですけれども、意見が分かれています。服装などで男の子か女の子か分かるのではないかと思うのですが。

エンマが後に東京女子師範学校、今のお茶の水女子大学の先生になるのですが、そのときの推薦書も残っています。文部省から政府への推薦状です。壮年期のフルベッキは地方伝道も行っておりまして、群馬県に伝道に行ったときの記述も確認できます。実は彼が筆で書いた額も残っています。「God is Love」という言葉が群馬県内の甘楽教会に掲げてあります。〔写真⑤〕

しかしながら、フルベッキはオランダやアメリカをすぐに去ってしまったこともあり、国籍を持っていなかったので、どこにも永住できないという問題を抱えていました。彼は日本政府に何とかしてほしいと頼んで、どうにか日本の永住権を得ます。そのときに奥さんから子供まで全員の名前が載りますが、実はフルベッキ夫妻は早くから別居しています。どういうことかと申しますと、先ほど言及した特許状が有効に働いたのは日本国内で教育に従事していたフルベッキとエンマの2人だけであったのですね。奥さんは子供たちを連れて、アメリカに永住してしまうことになります。ちょっと皮肉な話です。

この写真は明治学院で教授を務めていた時代のフルベッキです。〔写真⑥〕フルベッキの左隣に座る人物がよくご存じのことと思いますが植村正久、そのさらに左隣が井深梶之助です。最前列左から二番目に座る人物がマーティン・ワイコフです。

当時の明治学院キャンパスの古い写真もあります。神学部兼図書館だった建物が現在も残っています。フルベッキはこの建物に研究室を持っていました。もう一枚の写真、これは最晩年の学生との写真ですね。最前列右から3番目に座る人物がフルベッキ、左隣にワイコフ、井深梶之助と続きます。最前列一番左が植村だと思います。フルベッキは明治学院で神学教育も熱心に行いましたが、残念ながら68歳で亡くなります。

写真⑤　中島撮影

写真⑥　明治学院歴史資料館所蔵

彼は極端に謙虚な人でした。その謙虚ぶりは、自らを謙遜するのではなく、自分のことに触れることを避けられるならば努めて触れないという姿勢でした。そ

れから物欲が全くない人でした。総理大臣並みの給料をもらっていましたけれども、すべて他人にあげてしまうのですね。残された家族は「なんでお父さんは経済観念がないのだろうか。もっといい生活ができたのに」と嘆いていたと思います。

それから、フルベッキには音楽の才能もありました。モラビアン・アカデミーを卒業した後、音楽の特訓を受けましたが、それがきちんと身についていました。彼はユーモアにも富んでいました。

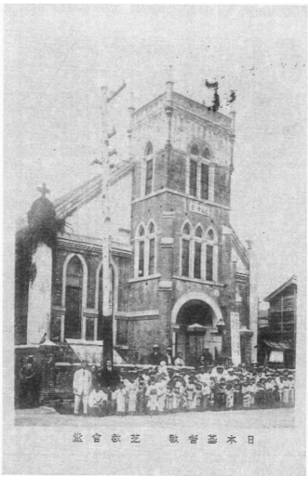
ワイコフは追悼文で「彼は神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」と語っています。「神が取られたので」ということは、神の元に帰ったという意味です。

このスライドは葬儀があった芝教会の古い写真です。〔写真⑦〕芝教会は東京の港区にありますが、この教会堂は関東大震災で崩れてしまいました。フルベッキの葬儀は、これはもう錚々たるメンバーが来ています。教会関係者や駐日アメリカ公使。今でいう大使ですね。それから、長崎時代に関係があった人たちが皆、葬儀に参列しています。

その後、フルベッキの墓碑を建てようということで、墓碑の建設委員会が発足しました。長崎致遠館にいた教え子、例えば何礼之や副島種臣などがいます。高橋是清、本野盛亨、岡田好樹もいますね。このスライドは青山墓地に建てられた彼の墓碑です。〔写真⑧〕妻のマニヨンもアメリカのカリフォルニアで亡くなった後、遺骨が運ばれ、2人そろって日本に埋葬されています。現在、明治学院のチャペルの前にフルベッキの記念碑があります。フルベッキを明治学院も顕彰しているということになります。〔写真⑨〕

非常に雑駁でしたが、フルベッキの誕生から終焉までということで、その生涯について講演させていただきました。

どうもご清聴ありがとうございました。




写真⑦　中島所蔵

写真⑧　中島撮影

写真⑨　中島撮影

〔資料〕

## 「フルベッキ博士の生涯と日本の近代化」年表　　編集：中島耕二

| | 西暦 | 元号 | 年齢 | 居住地 | 移　動 | 事　項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| オランダ時代 | 1830 | | | ザイスト、オランダ | 1月23日誕生 | 8人兄弟姉妹の6番目に生まれる。父は村長、酢醸造業主、小地主。<br>両親とモラビアン教会に通う。両親は共にルター教会信徒であったが、ザイストにはルター教会がなかったので、この教会の礼拝に出席した。<br>フルベッキはモラビアン教会で幼児洗礼を受けたとグリフィスは書いているが、ザイスト市の記録ではルター教会信徒とある。（＊村瀬453頁、伊藤16頁）学齢となり町のモラビアン教会の学校に入学した。1847年に卒業。自宅と教会ではドイツ語、町中ではオランダ語を使った。 |
| | 1831 | | 1 | | 両親<br>父　Carl Heinrich Wilhelm Verbeck（1797-1864）<br>母　Maria jacobina Anna Kellerman（1791-1852）<br><br>兄弟姉妹（3男5女）<br>姉Emma（1820-1851）<br>姉Alina（1822-1854）<br>姉Minna（1824-?）米移住<br>兄Walter（1825-1900）米移住<br>姉Bianca（1827-?）米移住<br>本人Guido（1830-1898）　米移住<br>弟Willem（1831-1863）<br>妹Selma（1833-?）米移住 | |
| | 1832 | | 2 | | | |
| | 1833 | | 3 | | | |
| | 1834 | | 4 | | | |
| | 1835 | | 5 | | | |
| | 1836 | | 6 | | | |
| | 1837 | | 7 | | | |
| | 1838 | | 8 | | | |
| | 1839 | | 9 | | | |
| | 1840 | | 10 | | | |
| | 1841 | | 11 | | | |
| | 1842 | | 12 | | | 12、3歳の頃ギュッツラフの中国伝道の説教をザイストで聴き感動する。<br>従来、ユトレヒトの工業学校で学んだとされていたが、当時ユトレヒトに工業学校はなかった（＊村瀬355頁、伊藤24頁）。青年期になると文学、特に詩に関心を寄せた。 |
| | 1843 | | 13 | | | |
| | 1844 | | 14 | | | |
| | 1845 | | 15 | | | |
| | 1846 | | 16 | | | |
| | 1847 | | 17 | | モラビアン学校卒業 | 1847年から自活する。この年に学業を終えてザイストの鋳鍛造工場で働き始めたものと思われる。<br>その後、おじに借金を申し出て、ピアノ、オルガン、声楽、英語、フランス語の学習を決意する。借金は3年後に利子付きで返済を約束。<br>（おじへの1850年6月27日付けの手紙 ＊＊井上）<br>1849年のザイスト市の記録では鍛冶屋勤め、1852年では鍛冶屋弟子奉公（＊村瀬355頁、伊藤16頁）とある。後年アメリカで製図、鋳物製造、土木工事に従事したが、母国での実労働を通して鋳鍛したものと思われる。造技術を習得。 |
| | 1848 | | 18 | | | |
| | 1849 | | 19 | | | |
| | 1850 | | 20 | | | |
| | 1851 | | 21 | | | 妹セルマの夫George Van Duers牧師から渡米を勧められる。 |
| アメリカ時代 | 1852 | | 22 | グリーンベイ、WI | 9月2日Amsterdam出航, NYへ向かう | Green Bay, WIのタンク牧師経営の鉄工場で働く（～1853年8月） |
| | 1853 | | 23 | ヘレナ、AK | 11月にヘレナに移動 | 良い報酬を求めて技師として土木工事に従事。孤独を覚え教会に通う。 |

| | 西暦 | 元号 | 年齢 | 居住地 | 移　動 | 事　項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| アメリカ時代 | 1854 | | 24 | ヘレナ、AK | 9月にグリーンベイに戻る | 7月コレラに罹り入院、生死の境を彷徨う。回復したら献身を誓う。9月に |
| | 1855 | | 25 | グリーンベイ、WI | | Green Bayに戻り鉄工所を経営し失敗。実業家を諦める。 |
| | 1856 | | 26 | オーバン、NY | ～4月グリーンベイ、6月神学校受験 | 9月長老教会オーバン神学校入学 授業料と寄宿費は無料、諸経費は負担<br>神学校のクアイアでテノール担当。S・R・ブラウンの教会で応援<br>ドイツ系住民にドイツ語で説教、ミス・マリア・マニヨン出席 |
| | 1857 | | 27 | | | |
| | 1858 | | 28 | | | |
| | 1859 | | 29 | | 5月7日NY出　航、11月7日長崎到着 | 神学校卒業、按手、オランダ改革教会転会、マリア・マニヨンと結婚 |
| 長崎時代 | 1860 | | 30 | 長崎、崇福寺広徳庵 | 1月26日長女エマ・ジャポニカ誕生 | 通詞の何礼之、平井義十郎、本野周蔵らを指導、2月9日長女エマ死去 |
| | 1861 | | 31 | 崇福寺広福庵、高台住宅 | 1月18日長男ウイリアムズ誕生 | 前年に本間郡兵衛を日本語教師として雇う。 |
| | 1862 | | 32 | | | |
| | 1863 | | 33 | 5月～10月上海 | 2月4日二女エマ・ジャポニカ誕生 | 生麦事件後の薩英戦争禍風評のため出島、上海に避難（～10月13日） |
| | 1864 | | 34 | 高台住宅、7月大徳寺 | | 8月2日から幕府英語稽古所（のち済美館）で指導　年俸1,200ドル |
| | 1865 | | 35 | | 二男チャニング・ムーア誕生 | 5月から肥前鹿島藩士谷口藍田に日本語学ぶ |
| | 1866 | | 36 | | | 5月20日佐賀藩家老村田若狭、弟綾部幸熙に授洗、横井兄弟をフェリスに紹介 |
| | 1867 | | 37 | | 三男グスターブ誕生 | 薩摩藩士5人のアメリカ留学斡旋、切支丹迫害状況を海外伝道局に伝える |
| | 1868 | 明治元 | 38 | | 7月15日　四男ギドー誕生 | 1月佐賀藩長崎蕃学稽古所（致遠館）と指導契約、10月大阪視察 |
| 政府お雇い時代 | 1869 | 明治2 | 39 | 神田一ツ橋の学校官舎 | 3月23日長崎出発、3月10日横浜到着 | 大学南校教師（年俸5千元）、ブリーフ・スケッチを大隈重信に手交<br>4月30日妻子アメリカ帰国。ウイリアム、エマはアメリカ残留 |
| | 1870 | 3 | 40 | | | |
| | 1871 | 4 | 41 | | 12月23日岩倉使節団横浜出航 | 11月17日明治天皇に謁見、11月20日三条実美太政大臣と会見 |
| | 1872 | 5 | 42 | | 12月28日五男アーサー誕生 | 5月第一大学区第一番中学校教頭（月俸600円）、5月6日天皇行幸 |
| | 1873 | 6 | 43 | 駿河台鈴木町21 | 4月16日賜暇休暇欧州に向け横浜出航 | 2月24日高札撤去、スイスで岩倉具視と会う、9月開成学校教頭解任 |
| | 1874 | 7 | 44 | | 9月23日三女エレノア誕生 | 12月正院及び左院翻訳局法律顧問、ラットガース大学神学博士号受領 |
| | 1875 | 8 | 45 | | | 左院廃止により元老院奉職 |
| | 1876 | 9 | 46 | | | |

| | 西暦 | 元号 | 年齢 | 居住地 | 移　動 | 事　項 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 政府お雇い時代 | 1877 | 10 | 47 | | 9月政府との契約終了 | 元老院解職、勲三等旭日中綬章受章、10月7日東京一致神学校講師、11月20日 |
| | 1878 | 11 | 48 | カルフォルニア | 7月17日送別会、7月31日一家で帰国 | 華族学校顧問（7月15日雇止）。8月24日サンフランシスコ到着 |
| 築地時代 | 1879 | 12 | 49 | 築地居留地19番 | 9月13日単身で日本に戻る | 東京一致神学校講師（週2日）、華族学校講師（月3日）、地方伝道開始 |
| | 1880 | 13 | 50 | 京橋区新湊町5丁目1 | 7月23日妻と子供3人横浜到着 | 2月誕生の六男バナード、7月13日船中で死去。信州伝道 |
| | 1881 | 14 | 51 | | 8月7日七男バーナード誕生（末っ子） | 華族学校教師辞任、旧約聖書の翻訳を進める |
| | 1882 | 15 | 52 | | | 信州伝道、旧約聖書翻訳常置委員翻訳委員に選ばれる |
| | 1883 | 16 | 53 | 京橋区入舟町8丁目1 | | 二女エマ東京女子師範学校教師、上州伝道、大阪で第二回宣教師会議 |
| | 1884 | 17 | 54 | | | 高知伝道、12月カリフォルニアに住んでいた四男ギドーが16歳で死去 |
| | 1885 | 18 | 55 | | 10月4日妻と子供たちアメリカへ | 以後、エマを除き妻子はカリフォルニア居住、別居となる。高知伝道 |
| | 1886 | 19 | 56 | | | 箱根伝道、新撰讃美歌委員となる |
| | 1887 | 20 | 57 | | | 明治学院邦語神学部教授（旧新約注解、説教学担当） |
| | 1888 | 21 | 58 | | | 九州伝道、明治学院理事員会議長 |
| | 1889 | 22 | 59 | カリフォルニア | 1月17日横浜出航、一時帰国エマ同行 | 7月エマ、エレノアの二人の娘とオランダ訪問 |
| | 1890 | 23 | 60 | | | |
| | 1891 | 24 | 61 | 築地居留地4番B | 2月9日横浜到着、エマと日本へ帰任 | 7月4日、国内旅行・居住の特許状得る。東京伝道学校（築地）講師 |
| | 1892 | 25 | 62 | | | 明治学院邦語神学部教授（旧新約注解、説教学担当）に復帰 |
| | 1893 | 26 | 63 | 一時帰国 | 7月14日横浜出航、10月29日横浜到着 | |
| 赤坂時代 | 1894 | 27 | 64 | 赤坂区葵町3番地 | | 関東一円、信州伝道 |
| | 1895 | 28 | 65 | | | 関東一円、北陸、名古屋、青森伝道。明治学院理事（～1898） |
| | 1896 | 29 | 66 | | | 関東一円、信州、北陸伝道 |
| | 1897 | 30 | 67 | | | 名古屋、信州、青森伝道。持病が悪化し地方伝道は医師より禁じられる |
| | 1898 | 31 | 68 | | 3月10日自宅で急死。　享年68歳 | 3月13日芝教会で葬儀、500円御下賜金、近衛連隊儀仗兵、青山墓地に埋葬 |
| | 1899 | 32 | | | | 12月知友によって墓碑建立 |
| | 1911 | 44 | | | 4月2日妻マリア Alameda, CAで死去 | 享年71歳 |

＊　村瀬：W.E. グリフィス著、村瀬寿代訳編『新訳考証日本のフルベッキ』（洋学堂書店、2003年）
　　伊藤：伊藤典子『フルベッキ、志の生涯―教師そして宣教師として』（あゆむ出版、2010年）
＊＊　井上：井上篤夫氏所蔵フルベッキ書簡